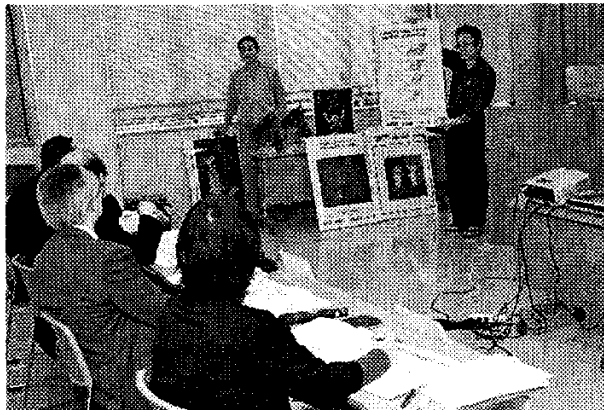


◆薩摩川内市の提案公募型補助金
公開プレゼンテーション 4日、同
市役所であり、2012年度分について、
書類審査を通過した12団体が参加し
た。事業は、教育、文化、商店街振
興など幅広い分野に及び、参加者は
パネルや実演を通して趣旨や意義を
説明した。補助金等評価委員会のメ
ンバーは、事業の継続性や事業費の
内訳を詳細に尋ねた。同補助金では、
市民自らが公共性の高い事業を企画
し提案。07年度から補助金を予算化
している。



平成23年12月17日(土) 南日本新聞

薩摩川内総局・安藤和明

記者の目

「磨かれるまごころの
光であまねく世を明るく
したい」。薩摩川内市ゆ
かりの作家、里見淳の言
だ。彼の「まごころ哲学」
を継承した「薩摩川内ま
ごころ文芸コンクール」
が昨年、終了した。
全国から1万点前後の
エッセーが寄せられてい
た。独居の母へ同居を勧
める息子の心もようなど、
まごころの話まった
数々の作品に触れ、感動
したことを思い起こす。
コンクールは市内の文
芸関係者が立ち上げ、市
の公募型補助金を活用。
だが、助成期限の3年間
が過ぎ、資金面で継続断
念に追い込まれた。
「まごころ青春短歌大
会」。先月、市内で表彰
式があり、青少年のみず
みずしい歌が紹介され、

「まごころ」の冠

心が洗われた。短歌同人
らが3年前に企画した。
一人の市議が本会議で
質問に立った。「この催
しも補助が切れてしまっ
た。大会がついてしま
えば市にとっても損失。
文化事業は短期間で自立
できるものではない」
制度の問題点の指摘と
併せて市議はこうもた
だした。「本来なら市が主
催してもいい大会だ」。
明確な答弁はなかった。
まごころ文芸コンク
ールは終了後、県外から存
続を求める声が相次いだ
という。民間のこの試み
は「まごころの街」として
薩摩川内市の知名度向上
にも寄与していたといえ
よう。市は「まごころ」の
冠をもっと大事にすべき
だろう。短歌大会の「光」
が消えないよう願う。

平成23年12月21日(水) 南日本新聞

12/12(月)の市議会一般質問でS市議が 提案公募型補助金について

- (1) 減少傾向にある応募者数及び交付金額についてどのような見解をお持ちか。
- (2) これまでの補助金交付の効果をどのように捉えているか。また、今後の見通しはどうか。
と質しているが、本委員会に関する答弁概要は。